

草庵仏教

第160号
(発行日)
2003年10月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:kimyous3@zeus.eonet.ne.jp
http://members.tripod.co.jp/souan211

《聞法会ご案内》

- 〈同朋の会〉
毎月22日午後2時
.....
- 〈念仏座談会〉
第1土曜日午後3時
第3土曜日午後3時
*8月の〈同朋の会〉及び
第3土曜日の念仏会は休み。

罪悪深重の身とは

B 「真宗の教えでは、私たちは罪悪深重の者であると聞かせていただきますが、自分が罪悪の者であるという実感がどうも乏しいです。ですから阿弥陀仏が罪悪の者を救うて下さるとお聞きしても有り難さをそんなに感じないのです。我が身の罪悪と

いのをどのように受けとればいいのでしょうか」
D 「仏教では罪悪についてはいろいろ説かれています。今回は人間の現実存在のあり様から理解してみたいと思います。古人の言葉に

《思うも思わざるも妄念、造るも造らざるも罪体》
という法語があります。この法語を手がかりにお話ししましょう」
B 「思うも思わざるも妄念とい

うのはどういう意味ですか」
D 「これは凡夫の心の本質を言い表したものでしょう。どんな思いが起こっても、たとえ善い心や美しい心が一時的に起こつても、もとの心そのものが煩惱であり妄念でしかないということ

です」
B 「では、造るも造らざるも罪体とは」
D 「罪を造っても造らなくてもおのれの存在自体が罪の身であるという意味です。たとえば人

を傷つけるとか、不当な収入を得るとか、不倫をするとか、人を差別するなどの罪を、造つても造らなくても、人の存在そのものが罪の身であるということ

です」
B 「どうもよくわかりませんね」
D 「これは人間を外から観察した結果としての言葉ではなくて、

仏法に照らされて自分自身を省み

た時、しみじみと感知される経験から出た言葉だと思います」
*
B 「罪のカラダということをも

う少し詳しくお話下さい」
D 「人の身体の本質を知る場合、動物を見るとよく分かります」

B 「人間も動物であることに変わりありませんからね」
D 「動物は狐にしても虎にしても魚にしても鳥にしても毎日何を

しているのでしょうか」
B 「餌を求めて、食べることが

主なことだと思えます」
D 「餌を食うことですね。動物

のカラダをもっているというところは食わねば生きられないようなカラダだということ。動物は食うことにエネルギーの大半を使っています」
B 「人間も同じですね。食わねば

生きられない体です」
D 「ええ、ですから人間の体に生まれているということは食わ

ねば生きられず、食うことに大変なエネルギーを使わなくてはなりません。それから動物は何をして

いるかを見てみるともう一つのことに気がつきます」
B 「何をしていますか」

D 「生殖行為です。動物の体自体がオスとメスに分かれていて、生殖行為をするべく定められているような体

自身がなっています。子孫を残すシステムとしてカラダがオスメスの身にな

っているのでしょうか」
B 「テレビ番組で〈生き物の生

態〉が取り上げられているのを見てますと、たしかに動物が発

情期を迎えると、いかに交合し子孫を残すかということに命が

けになっていきますね。人間の体も基本的にそうになっていると思

います」
D 「動物は食うことと生殖行為

をするような体になっていますが、人間も基本的に同じだと思

います。そのことで動物はお互いに食うか食われるか、奪うか

奪われるかの争いをしてるよ

うに思えます」
B 「そういう体をもっているか

ら、生存のための争いというか罪をなさざるを得ないので

ですか」
D 「こうした行為はしないですむという

ような選択の余地がないですから倫理学の原理から言

ざるをえません」

B 「それは仏教的な感性なので

でしょうか」
D 「私は純で自然な感性だと思

います。ただ仏教がこうした感性をことに大事にしているのは

事実です。というのは仏陀がまだ出家前のシツダールタ太子の

頃のある日、十歳ぐらいの時だったといわれています。農耕祭

に王家の一族として出席していました。クワ入れ式があつて、

農夫がスキで大地を掘り返すと、中から虫が出てきたのですが、

どこからともなく一羽の鳥が飛んできて虫をついばみ食いま

した。それを見た太子は〈あわれ、生き物は食いあうよ〉と嘆かれ、

林に入って長い間樹の下で想いに沈まれたという話が伝わって

います。こういう感性が仏教の教えの元にあると思います。で

すから科学的な観点では自然の単なるいとなみにすぎないこと

が、仏教的な観点からは痛ましい罪のすがただといえるのではない

でしょうか」
B 「そうすると食わねばなら

ない身体をもっていることは罪をもっていることとも言えますね」

D 「そう思います。動物が罪をもっている姿でもあるという考

えは、仏教に限らずインド思想の主流にある考えで、罪の身が

浄化されずにいると死んでもまた罪の身を受けて流転輪廻する。

罪の身が全く浄化された時、もはや罪の身を受けない、これを

解脱げだつといひます。解脱に至ることが理想であつて、身体をもつてゐることは罪がある証拠だといわれるのです。だから釈尊が悟りを完成された時に

「生は尽きた。清らかな行は成し遂げた。成すべきことは成し終つた。これが最後の生で、この後再び迷いの生は受けない」と言われたと伝えられています」

B 「身体をもつてゐることが罪がある証拠なのですか」

*

D 「そう言えるのではないでしょう。ただ他の生き物と違って人間は罪が非常に露骨になります。そういう意味では他の生き物と比べて大變罪が深い」

B 「人間（凡夫）は罪悪深重といわれるのですね。なぜですか」

D 「人間は他の生き物と違って知性をもつてゐるからです」

B 「なぜ知性をもつてゐると罪深くなるのですか」

D 「凡夫の知性は自他を分別し、自分の生を有利に確保しようという我愛的な知性です。そんな知性で（食うていく）（生計を立てる）（収入を得る）（金儲けをする）ことを考えるのです。そうすると（もつと）こうしたら食うに困らない。ああすればもつと儲かる」とか（もつと貯めておかねば将来が不安だ）というように考えますから、動物のようにその日暮らしてその日一日食えさえすればいいとはなりません」

B 「動物はたくわえないですね」

D 「動物は足るを知つてゐるといえます。アフリカのサバンナにゐるライオンは腹が一杯になつてゐる時は、目の前に子鹿が走つてゐても襲おそいません。必要以上に求めないのが人間以外の生き物の姿ですね」

B 「人以外の動物は足るを知つてゐるのですか」

D 「そうなんです。人間はなまじ知性がありますから、容易に満足しません。食欲になるのが人間（凡夫）です。釈尊の言葉にも

《たとえ貨幣かへいの雨を降らすとも、欲望の満足まんぞくされることはない》とあります」

B 「人間に知性があるから食欲になるのですか」

D 「ええ、その知性が純粹で清らかな知性なら自分の欲求をコントロールできるでしょうが、残念ながら凡夫の知性は我執・我愛の染みついた、いわば利己的な知性ですから、どこまでも（これだけためれば安心だ）（もつと収入がなければ食うていけぬ）あるいは（こうすればもつと楽しい）（ああすればもつと気持ちがいい）などと、欲求が過剰になります」

B 「食欲になるのですか」

D 「ええそうです。凡夫であるかぎり食欲の罪をもつてゐます。凡夫について聖人は

《凡夫といふは、無明煩惱むみやうぼうらうわれらがみにみちみちて、欲もおお

く、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころをおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえず》といわれ、また食欲について

《食欲といふに二つあり、一つには姪食いんごん、二つには財食なり》といわれています。姪食いんごんというのは男女の間での過度の欲愛です。財食ざいじきというのはお金や財産への過剰な欲求です」

B 「俗な言葉で言えば色気と食じき気ですね」

D 「そうなんです。それでこういう身体をもつて生まれたから罪体ざいだいといふのです」

*

B 「色気と食じき気があることがそれほど罪とは思えません」

D 「そういう食欲は思い通りに行かなければ瞋恚しんにを起こします。また、食欲がひとたび社会生活や人間関係の上での具体的な行為として現れると、実に浅ましく、汚く、いやらしく、おぞましく、ときには大變むごい行いとして現れるのです」

B 「たとえば財食ざいじきについてはどういふ行いですか」

D 「これはもう日常生活から産業界、政治の世界まで、私たちがどんなことをして経済的な利益を確保しようとしてゐるかを反省すればすぐにわかります」

B 「金銭上きんせんじやうのことで私たちは浅ましくなつてゐるのですか」

D 「そうですね。どんな時に人はウソをつきやすいかといへば、

自分の上に利害損得が大きく関わる時に、ウソをついて利益を得たり、損をまぬがれようとするのです。たとえば、失業保険は次の仕事を見つげるための制度ですが、仕事を見つげる気もないのに貰もらわないと損やというので、カッコだけは仕事を探さがすふりをするというのがよくあります。厳密に言えばこれもごまかしです。外に、所得申告のごまかしなど、規模は大小さまざまですが、利を得んがためのウソは数えればきりがありません」

B 「へいぜい何とも思わずにしていることが、よく反省をしてみると結構いつわりやごまかしがあるのですか」

D 「ええ、しかも現代は会社ぐるみで悪がよくおこなわれます」

B 「輸入肉を国産に見せかける、関税の安い国から仕入れて関税の高い国から輸入したように見せかける、コンクリートの水増し、談合してゐるのにしてないように見せる、必要の無い検査づけや薬づけなど、大小無数にありますが」

B 「利潤りじゆんをあげるためにえげつないことをお互いしているのですか」

D 「政治家へ裏献金、権力者へのへつらいやすり寄りなども利害損得のゆえです」

B 「これらの元は食わんがため家族を養うためで、身をやしな

い、着て住むためですね。それ

がさらにより贅ぜい沢な衣食住を求めて食つていきます。そして新聞沙汰さたになる犯罪の多くはお金からみです。さらに性犯罪も多発してゐますね」

D 「それがやはり姪食いんごんに関わることで。性犯罪だけでなく、男が女を求め、女が男を求める、そういう身になつてゐるのが人間です。性愛をもつて求めて合あひ愛し合あひ、それゆえまた憎しみ合あひ怨うらみあうのです。そこにあさましことや汚いことやみにくいことが次々に起こつてきます。不倫や性犯罪などはその顕著な現れです」

*

B 「もとにもどりますが、人間の身体が食うていかねばならぬカラダであり、オスとメスの性をもつてゐるといふ、そういう人の身を受けて生まれてきたという、そこからさまざま悪が生まれてくる。そういう身体を総じて罪体ざいだいといふのです」

D 「そうなんです。罪の身といふことを感じざるをえないですね。だからやはり人間は死なな

いと仏にはなれないのです」

B 「では人は誰でも死ぬと仏になれますか」

D 「死ねばだれもが佛になるとは仏教で言つてません。仏になる因をいただいた人が死ねば仏になるのであり、仏になる因とは真宗では念佛の信心なのです」

（了）

歎異鈔 第十四章第二講

そのゆえは、弥陀の光明にてらされまいらするゆえに、一念発起するとき、金剛の信心をたまわりぬれば、すでに定聚のくらいにおさめしめたまいて、命終すれば、もろもろの煩惱悪障を転じて、無生忍をさとらしたまうなり。

(歎異鈔第十四章より)

《語注》

一念発起——初めてを一念といい、また一瞬を一念という。ここでは初めて信心が起ることをいう。
金剛——堅固で壊れないさま。
定聚のくらい——浄土に生まれることの定まったともがら(聚)の境位。
悪障——仏道を妨げるやつかいなもの。
無生忍——不生不滅の真理を完全にさとった仏の悟り。

《現代語訳》

(それは次のようなことによるのです。わたしどもは阿弥陀仏の光明に照らされて、本願を信じる心がはじめておこるときに決してこわれることのない信心をいただくのですから、そのときすでに阿弥陀仏はこの世ではこの身を正定聚の位につかせてくださるのであり、この世の命を終えれば、さまざまの煩惱や罪悪を転じて真実のさとりを開かせてくださるのです。)

*

《弥陀の光明にてらされ》るといふ、この光明とは何でしょうか。もちろん物理的な光というものではありません。光明

という言葉はイメージ言語です。隠喩としての言葉です。

では光明は何をたとえたものでしょうか。聖人の『弥陀如来名号徳』に「光佛」について左訓(説明)があり、そこに「光仏はきやう(経)なり」とあつて、經典の言葉であると示されています。私たちにとつて仏の光明は身近には経の言葉であり仏の言葉であります。

であれば仏の言葉(教法)を聞法することは佛の光明に照らされ養われることになりす。だからここで《弥陀の光明にてらされ》るとは教法を聞くことで、それによつて人に信心が起るのです。

*

ただし《教えを聞く》といつても、単に宗教家や仏教学者から、仏教的な話を聞く、あるいはそういう人の書いた書物を読むというのでは漫然としています。

今日、法話をする人もそれを聞く人も、注意を要することは、話す側はとかく「自分はどう思う、ああ思う」という自分の考えや感想を述べることを主眼にしてしまいがちです。また聞く側も「あの人の話」「この人の話」というふうになら「Aさんの話を聞いているのだ」と受けとつてしまいがちです。「要するにあれはAさんの考えだ」という軽い気持ち、裏から言うとは信頼感をもって聞いていないのです。話を聞いてはいませんが真剣に身を入れて聞いていないのです。それだから話をいくら聞き重ねても、疑惑が根にあつて、心底は閉ざされたままの聞法となりす。ですから信心がなかなか起らないのではないのでしょうか。

*

真宗の話は《何を聞く》のでしょうか。

それは經典の言葉・内容を聞くのです。仏語を聞くのです。

では真宗門徒にとつての經典とは何かといえ、弥陀の説かれた多くの經典を正依の經典と、そうでない經典とにわけます。真宗における正依の經典すなわち「正しく依りどころとする經典」は浄土三部經であり、なかでも大無量壽經であります。聖人は『教行証文類』の教巻に「真実の教を願さば、すなわち『大無量壽經』これなり」と仰せられ、大無量壽經を真実の經典とされました。そしてさらに『尊号真像銘文』に

「大無量壽經言といは、如来の四十八願をときたまえる經なり」といわれて、大無量壽經は如来の本願を説かれた經典であるとお示しになっていす。このことは、如来の本願を説くから大無量壽經は真実の經典であるといわれるのです。だから教法を聞くというのは大經に説かれた如来の本願を聞くことが聞法の要です。

これをはずし、説く側がこのことを忘れると、説く人個人の思想や感想を語ることにならざると得なくなりす。また聞く人も、弥陀の本願を聞くことを離れ、身近に感じられる単なる道徳的な内容や仏教的ないろいろの教養や珍しい話を聞くだけの聞法になってしまうのです。

*

くりかえしになりますが、光明に照らされるのは仏のみ言葉を聞くことです。ことに如来の本願の言葉をくりかえし聞く。それは「南無阿弥陀仏のいわれを聞く」と、古来からいわれてきたのです。

真宗の聞法は南無阿弥陀仏のいわれを聞く、しかもナムアマミダブツとお念仏申しつつ聞くのです。

そうすると、弥陀の本願は大慈大悲の思し召しであり、また南無阿弥陀仏は大悲の結晶であるゆえ、聞法念佛することと続けること、それは弥陀の大悲に浸されていくことになりす。

こうして大悲の教法を聞き、念佛申していく時、聖人が『浄土和讃』に

「若く不生者のちかいゆえ
信樂まことにときいたり
一念慶喜するひとは
往生かならずさだまりぬ」

(若く生まれずばの誓いがある故、信心の起る時節が到来し、その信の一念の喜びを得る人は、浄土往生が必ず決定する)と申されているとおりに、一念慶喜すなわち信心が発起するのです。

*

一念というのは初めて信心が起ることです。それは「若く不生者のちかい」を聞いて聞いて聞きぬき、称えて称えて称えぬいていく時に、「ときいたり」で時が熟して、如来の信樂が私に至り届いて私の上に信心となつてくださるのです。

「若く不生者の誓いによつて衆生が助かる」ことを信じ切つて、念佛を与えてくださつている如来の信じ心すなわち(本當にこの誓いで助かることに疑いがないとお心)が私に届いて私の上に信心となつて発起してくださるのです。

如来様の「若く生まれずばの誓い」こそ、私を助けたもう誓いでありす。この誓いあればこそ私のような者も浄土に生まれさせて頂けるのです。ここで「若

し」といわれる御心がはなはだ有り難い。「この南無阿弥陀仏でもしお前が助からなかったら、私自身が佛となれないのだから、助けさせてくれよ、必ず助かるぞ」と、私に頭を下げてまで救わずはおかぬとの大悲の願心が溢れているではありませんか。

*

こうした如来の大悲が至り届いて、子どもの信心になってくださる、その信心は金剛の信心といわれています。もはや壊れることも離れることもない堅固な信心だからです。

私どもの心を凡心といい、凡心に信心が発起した姿は、凡心と信心が離れなくなった状態です。これはどういう事態でしょうか。

これについて『安心決定鈔』の言葉を今引用して味わってみたいと思います。それによると、

「**仏心はわれらを慙念したまうこと骨髄にとおりて、そみつきたまえり。**たとえば、火のすみに、おこりつきたるがごとし。はなたとすると、もはなるべからず。撰取の心光、われらをてらして、身より髓にとおる」と。炭と火とはまったく別物です。ところが炭に火が付くと、炭と火が全く離れない。切り離せない状態となります。ちょうどそのように、信心が凡心に届いて離れなくなったのが信心の姿です。凡心の炭と信心の火が離れない状態、これが信心が起こっている姿ではないでしょうか。それはいいかえれば阿弥陀仏に撰取された姿であります。信心が凡心に徹到して、凡心に染み付いて離れないのです。それを仏凡一体といいます。これをまた

《撰取不捨の利益》を頂いたというのでありましょう。

であればこそ、定聚のくらいにおさめしめたまうのです。このところを聖人は

「この信樂をうるるとき、かならず撰取してすてたまわざれば、すなわち**正定聚のくらいにさだまるなり。**

このゆえに信心やぶれず、かたぶかず、みだれぬこと、金剛のごとくなるがゆえに、**金剛の信心とはもうすなり**」(唯信鈔文意)

とお示し下さっています。

信心を頂く時、撰取して捨てられないという利益にあずかる、それゆえに浄土に生まれるべき仲間に入らせていただく。それを正定聚の位に入るといわれるのです。そうなるこの世のいのちが終れば、即座に浄土に生まれて佛の悟りを開いて仏になると仰せられているのです。ここでは仏になることを、「もろもろの煩惱悪障を転じて、無生忍をさと」と表現しておられます。

迷いを転じて悟りを開く、その迷いを煩惱悪障といい、佛の悟りを無生忍と表しておられます。前の文章で述べましたように、この身があるかぎり煩惱悪障はなくならず、死ぬまで続きます。しかしいのち終れば、それが縁で浄土に生まれ煩惱は転じて無生忍という佛と同じ悟りを完成するといわれています。

ここで煩惱悪障といわれていますが、煩惱は一般には仏道をさまげる障りになるというので煩惱悪障と熟語されたのであります。たとえば怠け心は仏道精進の障りとなり、金銭欲は布施行のさま

*

しかしながら真宗念佛においては、この煩惱悪障があるまま救われていくのです。怠け心の煩惱が起これば、それを縁として念仏し、金銭欲が起こつて人に施もしない浅ましい我が身を感じては念仏申す。まことにこの身は煩惱悪障の絶えないあさましき身であり、煩惱悪障を消すことも除くことも出来ぬ無能無力の身であるとお知らせいただければ、この身にかわつて如来がご苦労されて、「汝の煩惱悪障の身はこの私が引き受けて浄土へと生まれさせる。南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」と喚びかけたもう大悲を聞かせて頂くばかりです。そして聖人が

「**まことにこの身をもいとい、流転せんことをもかなしみて**」(ご消息)

といわれるように、この身がほのかながら厭われてまいります。三度三度食べれることが有り難いという思いの反面、三度三度食べなければならぬ身のあましさ、ほのかに感じるのです。食わなきやならぬ身ゆえに、どれほど煩惱が起こり、それによつてどれだけ浅ましいことをしてきたことか。痛ましいにつけても「我が国(浄土)に生まれるとおもえ」と仰せ下さる仏の仰せがいかにも有り難く感じられます。本来に「馬鹿は死ななきやなならない」じゃありませんが、凡夫は死ななきや佛になれないといわれることに道理の深さを感じます。「命終すれば、無生忍をさとしめたまうなり」はまことに尊いいわれであります。

*

仏の悟りのことをここでは無生忍といわれています。それは、ものの真実の相(すがた)は無生無滅、生まれることも

なく滅することも無い、ただ変化の連続であつて、生まれる何かがあり、滅する何かがあると実体視する迷妄、それが無くなつて、なにも生まれもしないし滅しもしないという真実を、ハッキリと認識してさとのを無生忍といひます。忍とは認で確認すること、ハッキリと知ることです。浄土に生まれると、煩惱妄念の迷い心が転じて真実ありのままの不生不滅の真実をハッキリと悟るといわれています。それが佛になるという意味です。本願を信じ念佛を申すところに正定聚に住し、いのち終えれば浄土に生まれて悟りを開いて仏になる、これを真宗というのであります。

(了)